

題目：アイボウという生き方ー石川県輪島市海士町の生業戦略ー

小島孝夫（成城大学）

要旨：

素潜り潜水漁は沿岸域で小資本の漁撈用具で操業できる生業であるため、女性の生業として選択されることが多かったが、輪島市海士町では女性が潜水漁を家業として継承していくための家単位の戦略が存在した。

また、女性が一定海域で潜水漁に従事するためには、それぞれが安定した漁獲量を確保できるような漁場の棲み分けなども行われていくことになった。それを実現するために、潜水漁に関する技術や漁場に関する知識が家族間や親族間で継承されていくことになった。この継承方法がアイボウという方法で、海士町の海女漁の特徴の一つとなっている。

一方、海女漁は女性が小資本の漁撈用具で操業できることに加えて、自然界に生息する貝類や海藻類の更新性を念頭において行う採集活動は、かつては経済的な投資を必要としなかったため、婚姻等によりシントク（分家）となった夫婦がジカタ（地方）に居宅を得るための資金確保のための有効な手段にもなった。そのことを可能にしたのが輪島沖約 20km 沖合いと約 50km 沖合いに位置する七ツ島と舳倉島の存在で、とりわけ舳倉島という生産と生活を担保できる場所が存在することで、海士町における海女漁の漁場選択は目的に応じて明確に選択されていくことになった。海士町における海女漁は、海士町で暮らす人々が共に生きていくための手段として当該地域社会を安定した状態で維持していくための生業戦略であったし、アイボウをはじめとしたツレなどの住民自治的な海士町の人びとの生き方は海女漁が創出した文化でもあった。

本報告では、輪島市域の三家族のライフヒストリーを事例として、上記の事象について検証していくことを試みた。併せて、各家族の現状を通して海女漁が直面している課題と可能性についても言及することを試みた。具体的には、輪島市域で複数世代が海女漁に従事している三家族の戦略を、①海女漁に特化した生き方、②シントクの戦略、③緩衝装置としての潜水漁に分類して各家族の海女漁との関わり方を概観した。このことから海女漁に従事してきた個人の生きかたは、海士町が有する所与の条件のもとで、家の生計維持活動として選択された家単位の戦略を適えることを前提にしたものであったことを例示した。次いで、海士町においてこのような選択が可能になった背景について、海女漁の特性と海女漁をめぐる自然的環境・社会的環境に分けて指摘した。指摘事項は次のとおりである。

なお、本報告の事例は、石川県編・発行『平成 26・27 年度 海女習俗調査報告書ー輪島における素潜り漁及び関係する習俗ー』2016 年、所収の「家業としての海女漁」(pp. 165-173) をもとにしていることを付記しておく。

(1) 海士町における海女漁の特性

海女に必要な身体的要件は、心臓が強く、息が長く、視力が良いことだといわれている。これらの身体的要件は天性のものに加えて、子どもの頃からの鍛錬によって向上されていく面もあるが、概して、加齢にともない低下していくものである。それに対して、経験を積み重ねることで習得する採捕技術は深まり、漁場に関する知識は豊富になっていく。両者は個人の経験に応じて蓄積されていくものである。一般に、海女漁は加齢による身体的要件の低下を、蓄積されていく技術や知識で補うことで、高齢期を迎えても熟練状態を維持することができている。

海士町では、3種類の海女がいるといわれており、なんとなく潜っている海女、船頭に言われるまま潜る海女、自分で考える（船頭に指示が出せる）海女というように分類されるという。この分類は海女たちが一人前になる過程を表しているとも言い換えることができる。海士町の海女漁の特性として、海女が一人前になるまでの間、海女漁の技術や漁場に関する知識の伝達が同族間で行われていることがあげられる。三重県や千葉県などでは、漁場までの移動に同じ船に乗り合わせることがあっても、海女漁自体は個人単位の漁となるため、母娘であっても互いの漁の様子などをつぶさに見るような機会はない。

なお、海士町には、全国で見られるような海女小屋は存在しない。舳倉島では自宅からそのまま出漁することになるし、海士町から出漁する磯入り組合の乗合船は、防寒避暑や休息のために船体後部をテント仕立てにして一定空間を囲い、舳倉島までの移動時間を海女小屋のように過ごせるようにしている。

(2) アイボウという生き方

舳倉島ではアイボウをするのは親子が原則で、オヤコデサガルという言い方をしていたという。海女の稽古をおえて、アイボウニナッテサガルようになると、一人前の海女の仲間入りができたことになったのだという。また、海士町特有のアイボウとオモテドンという制度は、同族内での協働作業であると同時に、同族内での教育制度であり継承制度でもある。初心者のオモテドンが年長者とアイボウとなることで一人前の海女となるための技術や知識を習得し、一人前の海女となるとそれらを直近の同族者に伝えていくことを繰り返していくのである。アイボウとなる海女とは均等に分配する前提があるため、互いが切磋琢磨する状況を自分たちで創出していくことで、両者の漁獲量を増加させていくという方法を案出していったのである。海女漁は加齢によって熟練へと展開する全人的な労働なのである。加齢などにより同族者とのアイボウが難しくなった場合は、同世代の友人とアイボウを組むなどの選択をし、高齢化によりオモテドンにもどってから、孫世代が参入してくれば彼女らの教育係としてアイボウに復帰することにもなる。海士町で海女漁に従事するという事は、女性たちが同族内で循環的につながっていくことになり、同族内で完結する資源利用と管理が実現されることになったのである。こうした同族を単位とした漁場利用は、結果的に同族集団間での漁場の棲み分けを実現し、広域海面での巧まざる資源管理の役割を果たしていくことになった。

(3) 海女漁と自然環境

海士町の海女漁を存立させてきた要件には、広範囲にわたる磯根漁場の存在がある。海士町のジカタの磯に加えて、七ツ島、嫁礁、舳倉島という広範な磯根漁場を前提にして海女漁が展開してきた事例は全国でも例がない。ジカタの磯根を中心にしながら、沖合の舳倉島では海女漁に集約した漁場開発が行われ、昭和30年代まで一斉渡島が行われていた。また、七ツ島の御厨島でも小屋掛けによる渡島が行われていた。

6月から10月まで海女漁に特化した生活を送り、11月からは灘廻りの行商や旅館などでの接客業に従事することで年周期の生計維持活動を行ってきた海士町の女性たちのくらしは、陸に耕作地などの生産手段を持たない沿海集落のなかでも特異な存在であった。海士町では、陸での仕事での集団形成も海女漁のアイボウの関係が基礎になっており、厳しい海況での潜水作業を安全に行うための工夫が海士町の女性たちの生業集団形成の論理となっている。

現在では漁船の速力の向上に応じて広域漁場の利用方法にも変化が生じており、舳倉島を拠点とする海女たちに対して、海士町から乗合のテント船で出漁する海女たちは、日帰りで七ツ島周辺に出漁していた時期を経て、漁船の高性能化によりかつて4時間かかった舳倉島までの移動が片道1時間30分で舳倉島に行けるまでになっている。現在では、ヒトシオ（9:30~13:30）だけの漁に変更されており、漁港での水揚げ時刻から逆算するように操業時間が設定されるようになった。広域漁場を目的に応じて使い分ける時代が終わり、舳倉島周辺漁場で海女漁が集約的に行われているような状況が現出している。

(4) 海女漁と社会環境

海士町では同族集団が前提となって、家族単位での海女漁の継承が図られている。そして、海士町において海女漁が社会保障制度のような役割を担うことができたのは、海士町自治会の存在があったからである。

海士町の海女漁は歴史的な背景を有するとされているが、現在でも、海女漁の存立のために自治会主導による一元化した資源管理が行われている。全国で進められている漁業協同組合の広域合併は、磯根資源の管理者であった単協の存在を無力化することになり、総じて、広域合併後の磯根資源の利用や管理はなおざりにされがちである。海士町自治会による資源管理が継承されている事由は、鑑札制度を介して海女たちに資源管理や資源維持についての啓蒙活動を行っていることに加えて、時代の要請に応じた現実的な判断を自治会の申し合わせとして行ってきたという面にもある。長男が親の漁業権を世襲するのは一般的であるが、海士町では次男以下でも娘でも、分家してシンタクになれば漁業権を認めるという取り決めがされていた。また、離婚して実家に戻った場合は、「一代限りの権利」として、漁業権を認めるようにしてきた。自治会は、海さえあれば食べていけるという考え方を基本にして、漁業権を調整し資源利用を一元的に管理し、海士町全体を覆う一種の社会保障制度の役割を担ってきたのである。

そして、海士町の人たちが複数世代で暮らしていける関係を維持していくためには、女性たちがアイボウという関係を前提に複数世代でつながっていく海女漁は欠くことのできない生計維持活動であったし、海女漁を存立させるためには自治会の存在もまた不可欠であった。

(5) 今後の課題

報告者自身が、三重県や千葉県での潜水漁調査に加えて、石川県下での潜水漁調査に従事して実感したことは、わが国における海女漁は、その背景となる自然環境や社会環境に応じて日本各地で多元的に発生・展開したものではないかということである。

それが現状では、ウェットスーツの導入や漁船の動力化などの物質文化の展開により、これまで女性により維持管理されてきた漁場に新たに海士が参入することにより、その循環的な漁場利用の仕組みが大きく崩れてきているのではないかということが危惧される。海士が参入することで、各地の潜水漁の多元性は平準化されつつあり、それにもない共通して磯根資源の枯渇が引き起こされている。地域によっては、海女の後継者が息子の海士であるという状況も発生しており、地域社会の現状は錯綜している。確かなことは、女性が集団で従事することで培われた各地の海女漁の存立が危うくなっている現状を真摯に受け止めることと、生業としての海女漁を担保するためには、地域の現状をふまえた資源管理の施策を講じなければならないということである。